

アート活動による能力開発の実践報告

Competency development through Art activities

有賀三夏^{†‡}, 永井由佳里[‡]

Minatsu Ariga, Yukari Nagai

[†]東北芸術工科大学, [‡]北陸先端科学技術大学院大学

Tohoku University of Art and Design, JAIST

arigaminatsu@gmail.com, ynagai@jaist.ac.jp

Abstract

The purpose of this research is to develop the methods of teaching art and design for students who are interested in participating in society. We will examine the creation of a curriculum that guides the formation of careers by means of active learning, which will lead the students to participate in society. An emphasis of this curriculum will be how people can contribute to their local community. By engaging in art activities that relate to improvement in environment, we propose an activity model which contributes to the development of problem solving abilities.

Keywords — Active learning, Art thinking, Multiple Intelligences

1. はじめに

芸術・デザイン系大学の特徴と問題

筆者の所属する大学にはデザイン工学部と美術学部があり、その学部の違いは所属学生の社会適応性において大きく異なる。各学生が所属する専門領域によって社会に対する自己との関わりの捉え方に違いがあることは既知のことであるが、特に美術科の学生（実践コースの日本画、洋画、版画、彫刻、テキスタイル、工芸のほか、総合美術）の学生は就学中の将来の目標としては、作家を目指している者が多いためか、社会的な意味での外より、内省としての内に注意を向けていることが多い。このような学生は、創造性や創造力を確かに持つてはいるが、1人仕事に長く時間を費やしているため、社会に適応するコミュニケーション能力などの基盤が乏しく、独創的な力が活かされるコンピテンスが養われていない。地域環境改善に関わるアート活動に学生たちを従事させることで、主体的な問題解決能力の育成に寄与する活動モデルを提案する。

2. 主体的な問題解決能力の育成（社会参加を促す方法）

①社会と自己の関係

芸術大学という特殊な環境領域で学ぶ学生が自らの能力に向き合い、社会に求められる人材になるた

めには、ジェネリックスキルの必要性を自覚させるための、学生に適したアクティブ・ラーニング（AL）型キャリア形成カリキュラムの作成が必要である。芸術系の学生が持つ、専門性のある個人の技能や技量が利他的な社会貢献の活力に繋がれば、学生達の創造性や創造力が具体化されるとともに、地域社会にも彼らの特性に対する理解が得られるのではないかと考えた。

②動機づけについて

筆者は東北芸術工科大学に勤務し、芸術を創作する際の創造力に関わる思考プロセスを「芸術思考」と呼び概念化し [1]、芸術学部の大学生に対しての社会力の意識的な醸成、「社会に求められる人材」を目的とした教育プログラムを「芸術思考」のプロセスとその基盤となる多重知能理論の「8つの能力」の観点から実践を通して検証分析してきた。これにより芸術系の学生が持つ創造性や創造力を専門的能力とし、社会と接続させ「社会力」や「生きる力」として説明付けようと試みている。

多くの大学で PBL (Project-Based-Learning) などの AL が全国に普及し、試行されているが、芸術学部の学生には特有の文化や環境構成があり、PBL を導入する際にもまずそれを解明する必要がある。それを踏まえての ALこそ、精神や行動を質的に変容させるだけでなく、発達的変容の重要な契機となるのではないかと考えるに至った。同時にこれまでの実践の課程で、学生達が「大人になる過程で自然に身につくもの」と考えられてきた能力（行動力、考える力、など） [2] が意外と習得されていないことに気づき、前段階の準備が必要であると観取した。そこで、大学生という限られた時間の中で実施可能な基礎力と能力(技能と技量)を活かしつつ、社会性も同時に身に付く、知識・能力活用型の AL カリキュラムの作成を試みた。

3. 知識・能力活用型 AL 実践の紹介

学生との AL 実践活動は 2014 年より始動し、以降主に 3 箇所(図 1)との協働活動が継続している。企画に参加する学生は、大学の講義や演習時間終了後に課外授業として有志参加しており、学年や専門コースがそれぞれ異なるメンバーが 15 名ほど在籍している。企画ごとにメンバー構成の多少の変動があるが、リーダー的な役割を担う学生が常に 4 名ほどおり、積極的に後輩指導などを行っている。学生達には、多重知能理論や芸術思考、アートセラピー、ホスピタルアート等の知識に関する座学の時間も設けている。

図 1 活動の具体例

施設名	日本海総合病院	ボストン・チルドレンズミュージアム	よねおりかんこうセンター
場所	山形県酒田市	アメリカ、マサチューセッツ	山形県高畠市
開始年度	2016年7月	2014年3月	2015年4月
活動内容	・ホスピタルアート作成展示、 ・小児科病棟壁画作成	・ワークショップ企画 実践 ・作品展示	顔出しパネル企画 作成 イベント企画 ワークショップ開催
参加学生 (企画毎)	約50名	約15名	約50名

4. 検証と今後の課題

チルドレンズミュージアムや日本海総合病院など、子どもの育成の一環や施設的环境改善に関連するアート活動に学生が参画する活動モデルを提案することで、実践事前事後における調査研究が可能となった。故に学生が自ら社会への貢献を目指すことにも繋がってきた。施設側(病院、博物館、公共施設など)とアート制作側が連携して調査を実施することで、一方側からの環境づくりではなく、現場で求められている要望を概念化し明瞭に可視化していくことができる。

アートに関わる領域の地域貢献として、デザインシステム構築のビジネスモデルなどが注目されつつあるが、技術系の作品がどのように社会的に貢献できるかに着目した関連研究は極めて少ない。先行研究として心理学者のミハイ・チクセントミハイがシカゴ美術館附属美術大学で学生の創造性について調査したフロー理論[3]を参考にし、現在の芸術大学の学生が将来社会に還元する創造能力や技術についても考察する。芸術系の学生の協力を得て、先行研究を参考に現在の芸術系の学生の心境変化をリアルタ

イムで調査することが可能である。

これまでもアートには人を癒す力があり、創造する行為は人間の治癒力を促進させる力があると言われてきた。しかし、アートの力についての証明は、その良さを作品単体で説明するだけでは理解されない。筆者の専門領域は、芸術、心理学、教育、キャリア教育に跨るため、従来の単領域での解説や解釈ではなく、実践研究によってアートを社会と学際的に結び付けることを目指している。多重知能理論の提唱者であるハワード・ガードナーによれば、知能とは「情報を処理する生物心理学的な潜在能力であって、ある文化で価値ある問題を解決したり成果を創造したりするような、文化的な場面で活性化されることができるものである。」と概念化している[4]。本研究においては、芸術やデザインを学ぶ学生が現代社会で価値ある成果を創造するための能力が十分に備わっていることを示しつつ、将来的には、創造性に関わる他の分野にも実践可能な汎用性のあるカリキュラムの作成という形でまとめていきたい。

参考文献

- [1] 村山真理, 有賀三夏, 阪井和男, (2013) “生きる力を育む芸術思考”, 情報コミュニケーション学会, Vol.15, 2014年11月8日.
- [2] “「社会人基礎力」育成のススム”, (2006), 経済産業省, <http://www.meti.go.jp/policy/kisoryoku/2006chosa.pdf>, 2017.6.30 アクセス.
- [3] Csikszentmihalyi, Mihaly. “The systems model of creativity: the collected works of Mihaly Csikszentmihalyi”, New York: Springer, 2015.
- [4] ガードナー・H, (松村暢隆訳), (2001), “MI:個性を生かす多重知能の理論”, 新曜社